



# 只見町の“知恵”を発信するために

—作業工程表から見る自然と暮らし—

小松 大介（非文字資料研究センター 研究協力者）

福島県南会津郡只見町は、福島県の北西部に位置し、新潟県に隣接している。只見町は、北部の只見地区と中部の朝日地区、そして南部の明和地区が、昭和34年に合併してできた町である。各地区で育まれてきた民俗や方言が存在しており、隣接している地区でありながらも少なからず異なる民俗を見ることができる。また、非常に雪深い地域で、その積雪量は2メートルを超えることもある。かつては、新潟県魚沼市と東西に結ぶ六十里越えと呼ばれる道と新潟県三条市と南北に結ぶ八十里越えと呼ばれる道しかなかったため、冬季は雪で閉ざされることになる。しかしながらも、人々の営みは絶えず行われており、これらの雪に対処するための雪下ろしなどの除雪や、雪を利用しての作物の保存、冬季間に行われる伐採や狩猟など、独特な民俗を形成する一助となっている。そうした日々の営みの中で使用される道具である民具においては多種多様な資料を見ることができる。只見町では昭和40年代後半より民具の収集を始め、現在では5000点以上の民具が収集されている。只見町で行われてきた民具整理は、民具を直接使用した人たちが整理作業を行うという独特な整理スタイルを確立し、一般的に“只見町方式”という呼び方で、これから民具整理を行う自治体の注目を浴びてきた。2005年には、生業に関わる民具を中心とした「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」という形で、2333点の民具が国指定重要文化財に指定されている。

昨年度で終了した神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」において、地域統合情報発信班は、福島県南会津郡只見町を舞台とし、これらの豊富な資料を利用してインターネット上で、民俗・文化などの情報発信を行う「只見町インターネット・エコミュージアム」の開発を行った。この「只見町インターネット・エコミュージアム」では、只見町の景観・民俗事象・民俗映像・民具を複合的に組み

合わせることで、研究者は勿論のこと、只見町を知らない一般の人々、そして、只見町内の人々にもこれまで知られていなかった只見町を知ってもらうことを目的としている。「只見町インターネット・エコミュージアム」では、四つの部門を設けている。

一つ目は「只見町の俯瞰写真」で、小林地区・梁取地区の俯瞰写真から、地区内にある儀礼や史跡等をクローズアップし、文章と映像でそれらの概略を知ることができる。例えば、小林集落・梁取集落でそれぞれ小正月に行われる早乙女踊りの映像を見ることができ、隣接集落でありながらも差異があることを確認することができる。また、只見町に伝わる昔話も映像で見ることができ、インターネット上でありながらも、その場に居合わせているような雰囲気を楽しむことができる。

二つ目は「只見町の屋根葺職人」である。ここでは只見町で行われている生業の一つである屋根葺職人に焦点をあて、仕事の内容から儀礼まで民具とともに説明している。この部門は博物館でいうところの企画展示であり、「只見町の俯瞰写真」では概略的な説明であったが、一つの事柄に焦点をあて詳細な解説を交えて説明している。今後は新しいコンテンツを追加していくことで只見町をより深く理解することができるようになる。

三つ目は「只見町所蔵民具検索」で、先述の「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」として国指定重要文化財に指定された2333点の民具を検索することができる。検索方法は、民具名、キーワード、用途分類、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」で分類されている各作業分類によって検索することができる。得られた検索結果からその民具の民具整理カードを閲覧することができる。また、一部の民具では、高精細画像を閲覧することができるようになっており、その民具の使用痕まで詳しく見ることができる。

四つ目は「自然と暮らし」である。ここでは「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料の選定時に、



只見町インターネット・エコミュージアム  
 (<http://www.himoji.jp/tadami-item/index.html>)

作業ごとに記入された作業工程表をもとに只見町で行われていた生業の四季サイクルを紹介するものである。この「自然と暮らし」は今年度に開発を行う部門である。

今年度に開発を行っている「自然と暮らし」部門について詳しく見ていこう。本部門では先述の通り「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料の選定時に作成された作業工程表(図1)が基本となっている。この作業工程表は地元の方々が手書きで記入したもので、実際の経験に基づいているだけあって、研究者が気づかないような細かな点が記入されている。これらの内容は、先代、先々代から脈々と受け継がれてきたものであったり、記入者が経験から新たに獲得した知識であったり、学校や書籍からは学ぶことができない只見町ならではの“知恵”が含まれている。また、中には、その作業で使用する民具や作業の様子が図示されているものもある(図2)。そして、大きな特徴として、それぞれの作業における作業者のつらかったり楽しかったりといった思い出も書き記されており、経験者でないといわれない作業の実態が記入されている。この貴重な資料を「只見町インターネット・エコミュージアム」上で活かしたいと考え、本部門の開発に繋がっている。いかにわかりやすく

インターネット上で展開させるか、また、研究者も一般閲覧者も満足していただけるようなシステムを開発することがカギとなる。本部門では「春」「夏」「秋」「冬」のそれぞれのページを用意し、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」で作成された作業と自然との関わりを示す絵の上に、それぞれの季節で行われる作業分類であるゼンマイ採り・稲作・畑作・焼畑・狩猟・漁撈・山樵・麻糸製造・マタタビ細工・屋根葺を矢印にして示した。そして、それぞれの矢印を選択することによって、さらに細かな作業を見ることができる。細かな作業を選択すると、それに関する資料として作業工程表に記入されている説明、只見町がこれまで撮影してきた写真、COEで撮影してきた作業の様子を映した動画、作業で使われる主要民具を見る

ことができる。主要民具は、「只見町所蔵民具検索」と連動することで幅広く民具を見ることができるようになっている。

この主要民具は作業工程表に記入されている民具を抽出したが、大きな問題が残されている。その大きな問題とは民具名の問題である。只見町は只見地区・朝日地区・明和地区から成り立っている。このことが只見町に多種多様な民俗が残されている一因となっていることは先述の通りであるが、民具名においても同一の民具に対して複数の民具名が使われている。例えば、泥状の田を平らにならすために使用する木製の熊手のような民具があるが、只見地区では「エブリ」または「エンブリ」と呼び、明和地区では「手代棒(テジロボウ)」と呼ばれている。また、収穫した豆類を叩いて落とすために使用する二又の木製の棒があるが、朝日地区では「マメオトシ」と呼び、明和地区では「マトオリ」と呼ばれている。この「マメオトシ」はシナの木皮を繊維にして縊りかけたものを絡めとるときにも使用され、この時は「ヨツォカラミ」または、「ヨツォヨリ」へと名を変える。多種多様な民俗を示す好例とも言えるが、インターネット上で提示する際には、逆に閲覧者に対して混乱を与えかねない。「只見町所蔵民具検索」では、一つの民



図1

月	作業名	作業の順序・内容	使用民具	民具の図解	説明
5月	田植え	田植えの準備、田植え、田植え後の管理	田植え機、田植え機、田植え機		田植え機は、田植えの効率を上げるために使われる。田植え機は、田植え機、田植え機、田植え機
6月	田植え	田植えの準備、田植え、田植え後の管理	田植え機、田植え機、田植え機		田植え機は、田植えの効率を上げるために使われる。田植え機は、田植え機、田植え機、田植え機
7月	田植え	田植えの準備、田植え、田植え後の管理	田植え機、田植え機、田植え機		田植え機は、田植えの効率を上げるために使われる。田植え機は、田植え機、田植え機、田植え機
8月	田植え	田植えの準備、田植え、田植え後の管理	田植え機、田植え機、田植え機		田植え機は、田植えの効率を上げるために使われる。田植え機は、田植え機、田植え機、田植え機
9月	田植え	田植えの準備、田植え、田植え後の管理	田植え機、田植え機、田植え機		田植え機は、田植えの効率を上げるために使われる。田植え機は、田植え機、田植え機、田植え機
10月	田植え	田植えの準備、田植え、田植え後の管理	田植え機、田植え機、田植え機		田植え機は、田植えの効率を上げるために使われる。田植え機は、田植え機、田植え機、田植え機
11月	田植え	田植えの準備、田植え、田植え後の管理	田植え機、田植え機、田植え機		田植え機は、田植えの効率を上げるために使われる。田植え機は、田植え機、田植え機、田植え機
12月	田植え	田植えの準備、田植え、田植え後の管理	田植え機、田植え機、田植え機		田植え機は、田植えの効率を上げるために使われる。田植え機は、田植え機、田植え機、田植え機

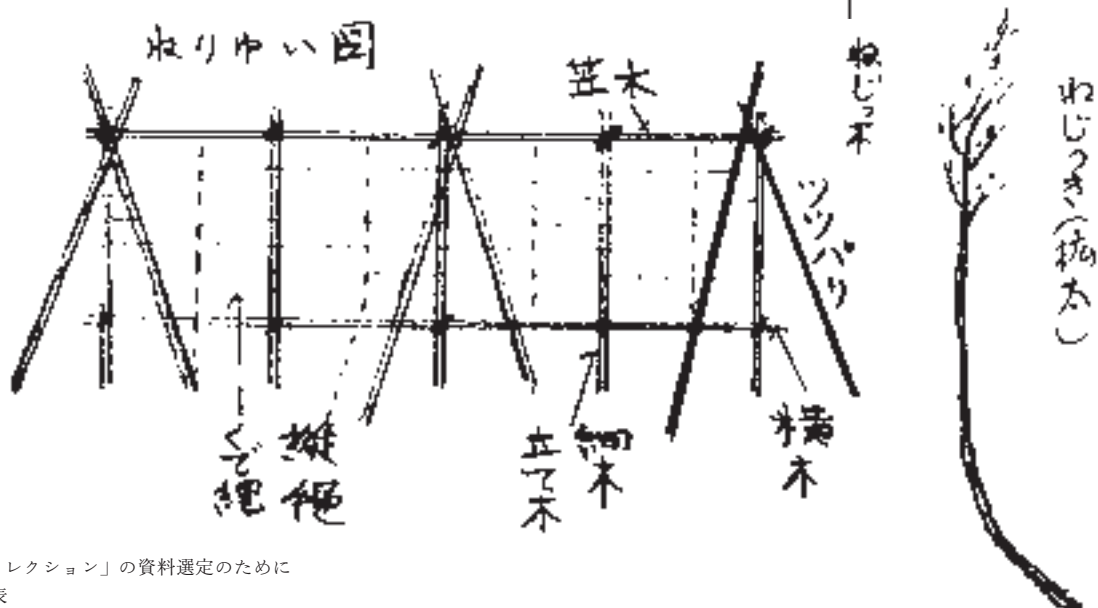


図1 図2 「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料選定のために地元の方々で作成した作業工程表

具名で検索をかけた場合、同一の民具であれば違う民具名であっても全て検索結果として表示させているが、「自然と暮らし」では全ての民具名を同一であると示すには煩雑になりすぎて困難である。現在のところ、それぞれの作業の説明の中で提示したり、「只見町所蔵民具検索」と連動することで対応させているが、民具名から見る事ができる只見町の民俗の多様性を欠落させてしまう恐れがある。今後の課題の一つである。

「只見町インターネット・エコミュージアム」は、「自然と暮らし」の完成により、当初、予定していた計画を

全うすることになる。しかし、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」以外の民具の「只見町所蔵民具検索」への登録や「只見町の屋根葺職人」のような企画展示の拡充、そして、閲覧者の反応からの更新など、多くの作業が残されている。5年後、10年後と開発を進めた上でどのようなインターネット・エコミュージアムになっているだろうか。誰もが使いやすく、そして理解しやすいインターネット・エコミュージアムにしていかなければならない。